2021年（令和3年）
3月号（No. 910）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

富士山の森林は登り続ける！
―40年間の森林動態調査から―

新潟大学教授　崎尾　均

近年の地球温暖化や大気中の二酸化炭素の増加などによる気候変動は、様々な場面で我々に大きな影響を及ぼしている。40年にわたる研究の結果、富士山の森林限界は加速度的に上昇しており、カラマツの形態にも変化が見られるという。気候変動が森林生態系に及ぼす影響について、崎尾教授にレポートしていただいた。

近年、世界中で気候変動が問題となる中で、気温や二酸化炭素の濃度は確実に上昇している。そして、気候変動が生物や生態系に及ぼす影響についても報告されている。氷河の融解をはじめとして、欧米などでは極域や高山帯などの植生の移動が報告されている。また、春先の植物の開花時期の早期化が原因で、昆虫による受粉のミスマッチなども明らかになっている。

日本では、気温などの長期観測データで確実に温暖化が進行しているとともに、気象庁による長年の生物季節の観測によって、ソメイヨシノの開花時期の早期化などが明らかになっている。私が小学生のころは入学式に満開の桜を見たが、現在では卒業式のころが桜の見ごろである。また、農業生産に与える影響や病害虫の北上なども危惧されている。日本有数の米の生産地である新潟では、ここ数年、気温上昇による米の品質の低下が問題になっており、高温に適した品種の改良も行なわれている。

富士山の南東斜面で調査

今から遡ること40年前、私は静岡大学理学部生物学科の4年生の卒業研究のテーマとして、富士山の南東斜面の森林限界の森林構造について調査を行なった。森林限界とは、厳しい環境のために森林が成立できる限界線のことを意味する（図-1）。特に冬季の低温、乾燥、強風、霜や、夏の高温や光合成期間の短さによって森林限界上部では樹木が小型化、低木化して、分布もまばらになる。日本の多くの高山の、森林限界の主要な構成樹種はハイマツであるが、富士山では、落葉性の針葉樹であるカラマツが優占種である。

その当時は、私がこの研究に40年間も関わるとは思うすべもなかった。1978年8月に、富士山南東斜面の森林限界に幅10m、長さ220mの永久調査区を設定し、

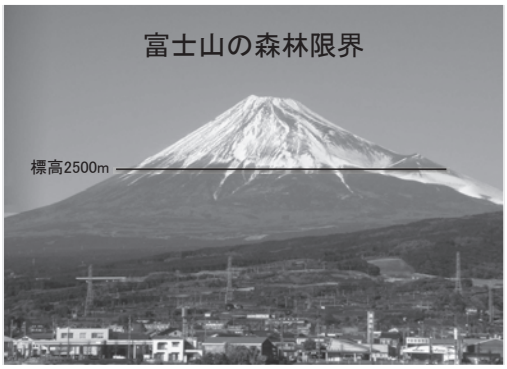


図-1　富士山の森林限界（東海道新幹線車中から）

目　次

富士山の森林は登り続ける！
―40年間の森林動態調査から― … 1
深田久弥没後50年に寄せて …… 4
エベレスト日本人初登頂から50年、
豊岡市の植村直己冒険館で記念フォーラム … 5
茨城県北ロングトレイル構想
～里山文化をつなぐ壮大な旅 …… 6
地域発「山の日」レポート⑥東九州支部 … 7
私を温かく迎えてくれたJACの仲間 … 8
連載　島の山旅への誘い3 …… 9
支部だより …… 12
　宮城支部／宮崎支部／熊本支部
新入会員 …… 14
図書紹介 …… 15
図書受入報告 …… 17
会務報告 …… 18
ルーム日誌 …… 18
会員異動 …… 18
INFORMATION …… 19
編集後記 …… 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

その中に分布している直径5㎝以上の樹木の樹種、個体数、直径、樹高などを測定するとともに、樹木の位置図も作成した。

このときの調査では、森林限界の上方から下方に向かって、裸地、草本パッチ（オンタデ・コタヌキラン・タイツリオウギなど）、広葉樹（ミヤマヤナギ・ミヤマハンノキなど）とカラマツの落葉低木、カラマツ林、常緑針葉樹林（トウヒ・シラビソ）へと変化していくことを明らかにした。また、土壌調査も行ない、森林の発達に伴って（下方に向かって）、落葉層の増加とともに土壌中の窒素濃度が増加していくことも明らかになった。

調査は10人がかりで、1週間かけて行なった。レストハウスに宿泊しながら、自炊をしての調査であった。レストハウスの従業員の方には、ときどき蒟蒻（こんにゃく）の田楽など差し入れをしてもらったことを覚えている。当時、研究室の指導教員であった増澤武弘先生（現在まで共同研究を行なっている）や学生たちと、森林限界のフィールドにおいて、将来、この森林限界がどのように変化していくのかを真剣に議論し合った。そのとき⑴山の下から暖かい上昇気流が上ってきて、それによって樹木の光合成が促進される、⑵森林限界を形成しているミヤマヤナギやミヤマハンノキの落葉が斜面上方に散布されて、土壌を富栄養化し、そこにカラマツが侵入していく、などの仮説が出された。そして、将来、森林限界は上昇していくのではないかと話し合っていた。

ミヤマハンノキに着目

私はこの仮説を検証すべく、もう2年間（実は3年間）、大学院の修士課程でこの研究を続けた。特にミヤマハンノキの低木に注目した。普通の植物は、根から土壌中の硝酸態窒素とアンモニア態窒素を吸収している。一方、ミヤマハンノキは根に根粒を持っており、根粒菌が空中の窒素を固定し、それを利用している。私はこのミヤマハンノキの光合成速度を測定して、この群落の年間の生産量を推定した。そのために毎月、調査地で数十枚の葉の形を紙にトレースして、葉量を測定した。一方で、葉の生産量や幹枝の成長量を測定することで、実際の生産量を測定して、光合成量から推定した値と比較した。また、土壌に供給される葉の窒素含有量の季節変化を測定して、落葉時期にも葉の窒素が枝にほとんど回収されないで、大部分が落葉として土壌に供給されることを明らかにした。そして、このミヤマハンノキが、富士山の森林限界の上昇に影響を与えるのではないかと結論づけた。

卒業後、埼玉県の林業職として働いてからも、たびたび静岡大学の研究室には顔を出して、富士山の調査などを手伝っていた。結婚したときには、妻と一緒に調査を手伝いに行って、結婚祝いのパーティまで、5合目のレストハウスで開いていただいた。

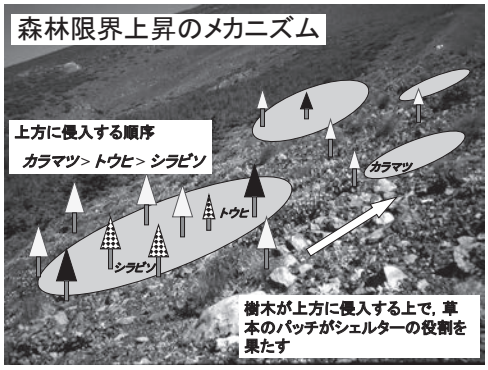


図-2　富士山における森林限界上昇のメカニズム

1999年、増澤研究室に所属する4年生が、私が78年に設定した調査地の再調査を行なった。このときは私も本格的に参加して、データを取りまくった。21年前の樹木のサイズの再調査に加えて、樹木の樹齢調査を行なった。それによって、これまで森林限界周辺の森林が徐々に上昇してきたことを確かめた。また、78年ごろに森林限界の上部で発芽したカラマツの実生の再調査も行なった。その結果、カラマツなど樹木の実生が定着成長するには、草本やミヤマヤナギの低木のパッチが、厳しい環境を緩和するシェルターの役割を果たしていることを明らかにし

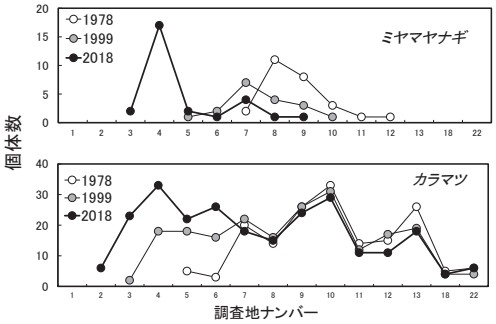


図-3　40年間の樹木個体数の変化

た(図-2)。このときの研究成果はSakio & Masuzawa（２０１２）として出版された。

森林限界の上昇が加速、カラマツの形態にも変化が

そして、２０１８年になって、調査地を設定してから40年後の調査を行なう機会が訪れた。今回の調査には、増澤先生をはじめとして、ＮＰＯ法人静岡自然環境研究会のメンバーとともに、新潟大学から２人の即戦力の大学院生を連れて行った。40年前はデジカメなどなく、カラースライドで写真を撮っていた。40年前と同じ場所を同じ角度から写真撮影しようと、何枚かプリントして準備した。

図-4　1978年の森林限界。カラマツがテーブル状の形態

９月28日に、40年間にどれだけ森林限界が変化したか、胸をワクワクさせながら調査地に向かった。調査地に着いてひと目見て、森林限界の変化に目を見張った。明らかに森林限界は上昇していた。調査を開始してから、その実感が現実のものとなった。40年前は、森林限界の上部はミヤマヤナギやカラマツが低木状になっており、全体を見渡すことができた。しかし、今回はカラマツが密生していて、40年前の面影はなかった。当時の写真を見ても、それがどこなのか全く検討がつかなかった。

図-5　2018年の森林限界。カラマツが直立して成長

調査データから、１９７８年～２０１８年の40年間に、森林限界が上昇を続けていることが明らかになった。それは個体数や材積の増加に顕著に現われていた（図-3）。特に最近の増加が著しく、１９９９年～２０１８年間の増加は、１９７８年～１９９９年間の増加量を超えていた。つまり、森林限界の上昇が加速していることが明らかになった。また、森林限界上部では、カラマツの実生が新たに裸地に侵入して、分布域を広げていた。森林限界上部のカラマツの形態は、１９７８年にはテーブル状であったが(図-4)、２０１８年には直立するように変化していた(図-5)。これまでは、カラマツの実生が定着した後、テーブル状のカラマツが形成され、それがある程度成長してから幹が立ち上がって成長していたが、最近では定着後から直立して成長を続けていた。このような森林限界の上昇やカラマツの形態の変化は、外部環境の変化によって生じたと考えられ、気候変動、特に温暖化や大気中の二酸化炭素の増加などがその原因であると考えられる。

これまで、富士山の森林限界の動態は、年輪解析やリモートセンシングを用いた研究で明らかにされているが、長期間にわたるフィールド調査で植生変化を明らかにした研究は、これが初めてである(Sakio & Masuzawa ２０２０)。

高山帯の生態系は気候変動の影響を受けやすいため、今後も富士山の調査地の森林限界の変化をモニタリングすることによって、気候変動が森林生態系に及ぼす影響をいち早く捉えることができると思われる。また、それによってブナ林など標高の低い生態系に及ぼす影響を予測することもできると考えられる。次回の調査である２０３８年まで、体と頭を鍛え続けていきたい。

【参考文献】

Sakio H & Masuzawa T (2020) Advancing Timberline on Mt. Fuji between 1978 and 2018. Plants:https://doi.org/10.3390/plants9111537

Sakio H & Masuzawa T (2012) The advancing timberline on Mt Fuji:natural recovery or climate change? Journal of Plant Research 125:539-546

（新潟大学佐渡自然共生科学センター・センター長）

REMEMBRANCE

深田久弥没後50年に寄せて

荒井正人

この3月21日は、深田久弥の命日だった。昨今、コロナ禍とは言うが、近郊の山には老若男女を問わず登山愛好家があふれている。しかし、その多くが『日本百名山』は知っていても、著者の深田久弥のことは知らないというのが現状と聞く。日本山岳会の若い会員にも、同様のことが言えそうだ。没後半世紀が経過し、深田久弥と親交があった会員の多くが鬼籍に入られ、氏の生前を知る方はほんのひと握りとなってしまった。改めて深田久弥の山岳界に果たした功績に想いを馳せ、著作を読んでみたいものである。

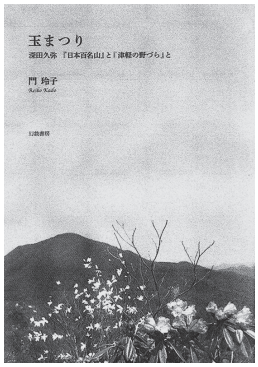
深田久弥終焉の地となった茅ヶ岳(左)　撮影＝長澤洋

茅ヶ岳で山頂への最後の休憩を取っていたときに突然倒れ、脳卒中で亡くなったことを新聞で知り、驚いた記憶がある。私事で恐縮だが、当時は予備校生で、山に興味を抱き、山登りがしたくなっていたものの、茅ヶ岳がどこにあるかは知らなかった。しかし、山に行けないながら、山岳雑誌を読み、図書館で『日本百名山』を読んでいたので、深田久弥の人となりを少しは知っていた。そのすぐ後に山登りを始め、今日まで『日本百名山』にどれだけお世話になったか計り知れない。著作も随分読んだが、正直なところ小説はあまり読まず、多くは紀行、随想、あるいはヒマラヤに関するものであった。

昨年、門玲子さんという作家・女性史研究家が、『玉まつり』という本を上梓された。サブタイトルに「深田久弥『日本百名山』と『津軽の野づら』と」とあり、山岳文学で知られるようになる前の、小説家としての深田久弥のことや、その作品についての見解などが書かれたエッセイである。

門玲子氏は1931年、深田久弥と同じ石川県大聖寺町（現・加賀市）の生まれで、金沢大学文学部を卒業。現在は愛知県大府市に住んでおられる。深田久弥の友人の娘さんという関係にあり、著書を読めば、大聖寺でも金沢でも、女学生時代には深田久弥にお供してよく散歩をされたという。可愛がられていた様子が窺える。また、門玲子氏は志げ子夫人とも親しく、興味ある話が多い。ひとりの女性から見た若き小説家・深田久弥が書かれており、こうした視点の著述はあまりなく、新鮮に感じる。

お住いの大府市にある「おおぶ文化交流の杜図書館」では、昨年、門玲子氏を招いての読書会を開催しており、このときの模様がホームページにアップされているので、誰でも読むことができる。『玉まつり』を読んで著者に聞いてみたいと思うことや、その答えが見つかるかもしれない。この機会に、ぜひ『玉まつり』を読み、読書会の模様も読んでいただきたいものである。



『玉まつり』の書影

没後50年。私の山歴も半世紀になるが、日本山岳会への入会も予想だにしなかったことであるのに、まさか深田久弥が委員長であった図書委員会の末席を汚しているとは……。数年前に深田クラブにも入会した。日本山岳会同様、高齢化が進んでいるとはいえ、深田久弥の「山への接し方」「文学」「人となり」を愛する精神は、永く引き継がれていくに違いない。

縁があったのだろうか？　不思議な気持ちで当時のことを思い出している。

＊『玉まつり』：2020年5月刊、幻戯書房、2800円＋税
＊ホームページ：「おおぶ文化交流の杜図書館」を検索→「電子図書館」→著者・門玲子氏が語る『玉まつり』執筆余話第1回、第2回

（図書委員会委員）

ANNIVERSARY EVENT

エベレスト日本人初登頂から50年、豊岡市の植村直己冒険館で記念フォーラム

東京・板橋区の植村冒険館で開催されたエベレスト写真展

好評だったオンライン講演会

この1年は、コロナ禍に翻弄され続けたような年だった。どのイベントも中止や延期を余儀なくされ、人の交流が極端に制限されて窮屈な世の中になってしまった。本会会員の活動も同様であろう。

私たちが企画している記念事業委員会（重廣恒夫委員長）の一環である「エベレスト登頂50周年記念フォーラム」も、本来は1970年の日本山岳会隊による日本人初登頂を記念して、2020年5月9日に開催されるはずだった。チラシも作成し準備を進めていたのだが、結局、緊急事態宣言の発令により、延期せざるを得なくなってしまった。ただ、1年延びたことで、当初からリニューアルのため使用できなかった、豊岡市の植村直己冒険館を会場として開催できることになった。

また、「記念フォーラム」が延期されたことで、代替のプレ・イベントをいくつか開催することもできた。会報「山」2月号で紹介されたZoomによるオンラインの連続講演会もその一つである。昨年10月から3ヶ月連続で、公募登山隊、気象変動、マロリーの遺体捜索などをテーマにした連続講演会はどの会も盛況で、会員外の方の参加も多く見られた。特に海外とラインを結んで、直接、遺体捜索隊の活動の話が聞けたことは、マロリーとアーヴィンの登頂に関する興味深い内容でもあり、しかも今後の海外講演会の可能性を示唆するものでもあった。

また続けて、東京・板橋区にある植村冒険館で「写真で振り返る日本人のエベレスト」展が昨年12月から開催されたことも、コロナ禍の中だが、エベレストの登山史を概観するうえで、貴重なプレ・イベントとなった。日本人初登頂から最近の超過密登山まで22枚のパネルで紹介し、期間中、430名ほどの来場者があった。

植村直己の故郷で記念フォーラム

その「エベレスト登頂50周年記念フォーラム」は、4月24日と25日の2日間にわたって開催される。先輩たちの登頂への想いを若い世代に引き継いでいくこと、そして、エベレストをより身近に感じてもらうことをメインテーマにしている。まず1日目は、「講演と映画の集い」。1970年の記録映像の抜粋が上映され、トーク・イベントとして、「日本人初登頂への思い」を、第2次登頂者である平林克敏氏に話してもらう。聞き手は、同じ隊員の神崎忠男氏。続いてエベレスト登頂者でもある元副会長の重廣恒夫氏に、「登頂ルートの解説と装備・技術の変遷」について話してもらう。最後にイラストレーターの黒田征太郎氏が「ライブ・ペインティング」を実演、その横で俳優の市毛良枝さんが詩を朗読するというアトラクションで終わる。

会場である小ホールの廊下展示室には、「写真で振り返る日本人のエベレスト」展や登山の歴史年表、エベレストの成り立ちの展示や登頂ルートを明示した頂上の模型、当時の装備類、頂上の石なども展示される予定だ。なお、展示期間中は、小ホールで『エベレストの長い道　海抜ゼロから頂上へ』という記録映画も常時上映の予定。映画と展示は4月20日から6月29日まで続けられる。

翌日は、植村直己の故郷の山、蘇武岳に登る交流登山を行なう。地元の山岳会のサポートを受けて、豊岡市民やエベレスト登頂者も一緒に蘇武岳に登り、市毛さんも加わって大杉・ブナ林をトレッキングしてもらおうというものだ。

両日ともごく少数だが、一般の参加希望者も募集する。申込み・問合せ先は、4月1日から植村直己冒険館（TEL 0796-44-1515）で受け付ける。

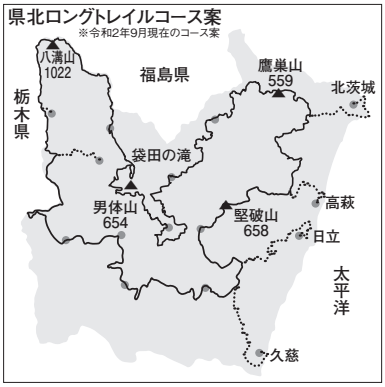
（創立120周年記念事業委員会委員　神長幹雄）

LONG TRAIL

茨城県北ロングトレイル構想
～里山文化をつなぐ壮大な旅

プロジェクト代表　和田幾久郎

関東の北端、茨城県の北部にロングトレイルを整備する「茨城県北ロングトレイルプロジェクト」。県北部の6市町に点在する里山と地域資源を結んで歩くトレイルの整備を目指すプロジェクトで、㈱ナムチェバザールが中心となり県内有志を募って始められ、現在は茨城県の公式事業としてコース設定を経て、整備事業が展開されている。茨城県北ロングトレイルのコースは、山岳地帯に入山したまま長距離踏破を目指すロングトレイルとは一線を画す、特徴的なものである。



周回320㎞を予定している長大なコースには、多様な地形が内包され、山並みを見渡す絶景や滝・川の流れを楽しむ水辺の景色など、様々な風景に出会える。地理的条件からも深い積雪などの厳しい状況はなく、コースでは四季を通じ、豊かな自然の移ろいを感じながら、歩く旅を満喫することが可能だ。同時に、今では貴重なものとなった、自然と暮らしの融合する日本の原風景が、茨城県北に贅沢に残されていることを実感しながら、里山を存分に巡ることもできる。

里の生活圏には日常の暮らしがあるが、来訪者にとってその日常は、非日常の豊かな体験として深く心に残る。里と山をつなぐように歩いて、様々な日常の中の非日常を体験し、里の歴史を感じながら繰り返し感動に出会うことができるのが、茨城県北ロングトレイルの最たる特徴である。

こうしたコースの中でひとつながりになると、一つ一つ単独ではなかなか注目されにくかった地域資源も、一体的で壮大な魅力を具えたものとして、新たな視点でとらえることができる。地元の誇らしいシンボルとして里山文化と地域資源が見直されれば、環境の維持管理にもさらに目が向けられることだろう。

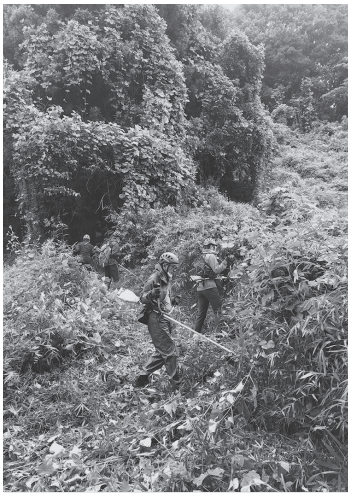
自然環境はただ放置しておくことが保護なのではなく、適切な管理をし続けることが肝要である。地元の大勢が関わりながら永続的に環境の維持管理を行なう、地域に根差した環境保護活動の新しい形を目指し、その礎として自発的に組織された「茨城県北ロングトレイル協力隊」をベースとして、プロジェクトは進められている。

今年度は協力隊を中心に、コロナ禍においても冷めない地元の熱意と協力姿勢に支えられながら、実際の整備活動が進められた。

2021年3月28日には、大子町・月待の滝から生瀬富士を経て袋田に至る区間が、茨城県北ロングトレイルの一部として開通する。この区間は、2019年10月の台風19号で被災したJR水郡線が運行を再開させる区間とも重なり、復旧後の地域活性化を後押しすることにもつながるだろう。

この開通区間を第一歩として、茨城県北ロングトレイルをつなぎ、地域一体となって里山の環境を維持し、ハイカーに対するホスピタリティを高め、茨城県北にトレイル文化圏を育て上げる。歩く旅をきっかけとして、ここにある文化を求める人々と、移住や起業などにもつながる絆を深めていく。「茨城県北ロングトレイルプロジェクト」は単なる登山道整備計画ではなく、こうした未来を見据えた、プロジェクトそれ自体が夢のある壮大な旅路だ。この春踏み出される一歩を大いなる始まりとして、夢の実現に向け着実な歩みを続けていきたい。

㈱ナムチェバザール代表取締役）


コース整備では協力隊が大活躍

地域発「山の日」レポート⑥東九州支部

支部創立60周年記念『新大分百山』を発行

東九州支部長　加藤英彦

山の日記念全国大会が大分で

1月元旦、今年も恒例の初日の出登山で県南の津久見市にある彦岳（639ｍ）に登り、仲間たちと新年のスタートを祝った。彦岳は大分百山の一つであり、その紹介文には「乳房の形が海路の目印になっていた名山」とある。山頂からは豊後水道から昇る初日の出が見られる人気のスポットだが、今年は、まるでコロナ禍による前途多難を予感させるような雲の中からの日の出であった。

彦岳山頂からの初日の出（2021年1月1日）

大分県は昨年8月11日、「第5回山の日記念全国大会おおいた2020」を開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症対策のため、この行事は今年の8月に延期されている。

しかし、こうした山々をホームグラウンドに持つ私たちは、正月から身近に山を楽しむことができる。積雪もなく、快適な冬の山の登山である。

大分の地では、「山の日」が国民の祝日として制定される前年の平成27年8月11日に、「山の日制定記念in大分くじゅう」というプレ・イベントも開催している。それほど大分の地は九州の中でも山に恵まれたエリアであり、行政も、その魅力を多くの人に伝えたいと、積極的にイベントを誘致し、PRにも努めている。

三代目の『大分百山』を上梓

さて、そういった背景を持つ東九州支部は、昨年、創立60周年を迎え、11月21日には、規模を縮小しながらも、なんとか祝賀会や記念登山を終えることができた。その60周年記念に当たり、支部が総力を挙げて取り組んだのが、ガイドブック『新大分百山』の発行である。振り返ってみると創立20周年（1980年）に記念誌の中で百山を選定、30周年（1990年）に単行本として『大分百山』の初版を発行、40周年（2000年）の2年後には、その改訂版を発行してきたという歴史がある。

まず、百山の見直し選定を行ない、会員の希望を募り、執筆する山を選んでもらった。執筆は33名の支部員たちが担当することとなり、取材、原稿書きと作業を進めていった。コースの調査、コースタイムの設定、写真撮影など、何回となく担当の山に出かけた。

今回の『新大分百山』の刊行に当たっては、以下のような特徴を考慮した。①オールカラーで全ページに写真用の上質紙を使用、②最新のルートを取材し、写真と概念図を挿入、③QRコードで登山口をスマホから読み取れる、④解説文には、選定の条件を考慮した山の歴史や謂（いわれ）、文化的な要素などを分かりやすく表現。

この本は、東九州支部員の情熱を込めた一冊となっており、多くの人たちに、このガイドブックを手に、大分の山を楽しんでいただきたいという気持ちで出版したものである。登り方は人それぞれ違ってはいるが、日本百名山、九州百名山を踏破して、最後に大分百山の完登を目指している人もいる。大分の山を訪れる際には、ぜひ参考にして登っていただきたい。

『大分百山』三代の歴史。左から1991年2月版、2002年4月版、2020年11月版

FOREIGN MEMBER

私を温かく迎えてくれたＪＡＣの仲間

バッテレミ・ドゥプル

前号に続き、今回も外国人会員を紹介します。バッテレミさんは、ヨーロッパ・アルプスの拠点シャモニで生まれた生粋のシャモニっ子です（そんな言葉があるのかはさておき）。フランスの山岳界と日本山岳会の交流の橋渡し役になってくれることを、期待しています（編集部）。

＊

ＪＡＣの皆さん、こんにちは。フランスのシャモニ出身で、31歳のバッテレミ・ドゥプルです。

２０１８年に来日したとき、私はＪＡＣの皆さんにここまで優しく歓迎されるとは想像できませんでした。そのときは全く日本語が話せなかったので、英語でＪＡＣのホームページから連絡しました。国際委員の和田薫さんに紹介してもらい、ＪＡＣのＢＣＣ（バックカントリークラブ）へ参加できたことを感謝しています。

登山やバックカントリー・スキー（以下ＢＣスキー）などは、祖父と祖母の代から家族共通の趣味です。両親は学生時代にスキーでフランス国内の山へ行ったり、海外登山もしていました。今でも60歳を超えた父は、ＢＣスキーや登山などを続けています。私が５歳のころから、シャモニの近くにあるスキー場サンジェルベで両親はスキーを習わせてくれました。そのお陰もあり、私は毎年のように冬の山を楽しんでいます。

日本にいる間は、ＪＡＣの皆さんのお陰でいろいろなＢＣスキー活動もできました。たとえば、妙高高原スキー場や岩手山、蔵王山にも行けました。そのほか、自分で北海道のニセコや富良野、利尻山でもＢＣスキーを楽しみましたが、その冬は、とても良い思い出となりました。

２０２１年に入り、コロナ禍の影響で家族とフランスへ帰りました。今はシャモニの近くに住んでいて、ＢＣスキーも少し楽しんでいます。ＢＣスキーに関する私の最高の思い出は、シャモニ～ツェルマット間を行くオートルートの経験です。２０１４年春に、兄２人と従兄１人の計４人で挑戦することにしました。全員スキーのレベルは同等で、５～６日間のツアーを計画しました。

平均標高３０００ｍで１週間過ごし、毎日が違う状況でした。特に５日目は、すばらしい一日でした。ヴァルソレイからは、バックパックにスキーを載せなければならない急な傾斜で、アルピニズムに近い箇所がありました。前の日の夜から雪が降り続いていたので、私たちは新雪の斜面を日の出に向かって登りました。その後に待っていたスキーを履いての下降ルートは、とても長いスロープが続き、パウダースノーがいっぱいの大滑降でした。４０００ｍ級の山々に囲まれた巨大な氷河に、私たちたった４人でした。最後に、息を呑むようなマッターホルンの偉容を眺めながら、目標のツェルマットまでスキーで滑り降りました。夢のような日々で、すばらしい思い出になりました。

私にとってＢＣスキーをしている間は、静かな環境に身を置き、雪と接するスキーの音に耳を澄ませ、体を動かしていることで幸せを感じることができるのだと思います。そして、毎日の生活の苦労や嫌なことをすぐに忘れられて、リフレッシュできます。

日本にまた住めるかどうか今は分かりませんが、コロナが落ち着いて、ＪＡＣ会員の皆さんがフランスに来られることができたら、大いに歓迎します。ＪＡＣが私を温かく迎えてくれたように、お返しでサポートさせていただきたいと思っております。私も日本語が難しいと感じた経験がありますが、日本人の方々にとってもフランス語は少し難しく感じられることでしょう。皆さんが少しでも安心して山を楽しんでもらえるように、協力が必要だと思いました。

またお会いできる日を、楽しみにしております。

（国際委員会委員）

連載■島の山旅への誘い3

佐渡島
―金北山、ドンデン山、金剛山、樫ヶ平山など

越後支部　藤井与嗣明

佐渡島の山概説

民謡「佐渡おけさ」に「北は大佐渡　南は小佐渡　仲の国仲米どころ」と唄われるように、佐渡島は、おおむね北東から南西にかけて、平行して走る二条の山脈と中央に沖積層となる国仲平野からなり、周囲267㎞、面積855㎢と、沖縄島を除いて日本一大きな島である。

大佐渡山脈には、主峰・金北山（1172m）を盟主に1000m前後の山々が連なり、山容は南に緩やかで北に急峻である。その主稜線は随所に断崖やザレが見られ、また、林間放牧が盛んで、牛馬の放牧による踏み付けから、広大な芝生場（シラバ）が維持されてきた。しかし、昭和40年代初めには放牧馬が、平成に入ると牛が山から姿を消した。このため日本芝の純度が高いとされたドンデン山一帯や石花高原、霧花高原など主稜線の大小のシラバが荒廃し、ススキや低木林へと移行し、今その姿を消しつつある。

一方、小佐渡山脈は、ほぼ中央に一番高い大地山（646m）をはじめ600～500m前後の山々が並び、その山容は丸みを帯びて女性的である。私のように国仲の大佐渡側に住む者は、小佐渡山脈を「前山」と呼んでいる。

佐渡の山は日本海型の気候で、冬は積雪が多く、夏は低山だから暑い。このため登山適期は春、秋が良いと言える。大佐渡山脈の植生はブナやナラ、杉などの高木林が多く、年間を通して降水量は多い。また、冬場の強風や積雪による奇形木や変形木も登山者を楽しませてくれるだろう。なお、鹿や猪などの大型動物がいないことから、草花への食害がないため春はフクジュソウやオオミスミソウ、ショウジョウバカマ、カタクリ、シラネアオイ、ニリンソウなど多くの花々が楽しめる。初夏のレンゲツツジやハクサンシャクナゲとともに、大佐渡の北側となる外海府・大野亀を中心とするトビシマカンゾウは見事な群落を呈する。

小佐渡山脈の植生はナラを主体に、中央の大地山から北東部にかけて主稜線にはユキツバキが群生、早春に尾根を染めている。大地山周辺にはオオミスミソウやフクジュソウ、カタクリ、シラネアオイ、オオイワカガミなども見られる。

主な山の登山ガイド

▲金北山

佐渡島の最高峰で、戦前まで男子7歳になると「初山参り」といって、山頂の金北山大権現にお参りし、帰りにシャクナゲの小枝を手折って家の戸口に飾る風習があったが、戦後は行なわれていない。戦前の金北山への登山は、多くの集落から登ることができたが、戦後、これらのルートの多くは消失した。ここでは栗ヶ沢からのルートを推奨する。

△栗ヶ沢～たて池の清水～じゅんさ（じゅんさい）池～祓川～神子岩～天狗岩～金北山

草花は佐渡の山歩きにおいて大きな違いはないが、ルートの特色として祓川から神子岩の間で、ブナ林の登高が気持ち良い、特に新緑のころが良い。神子岩から上部は眺望も良く、高度を上げるにつれて晴天であれば越後の連山、飯豊や朝日連峰、白馬岳など後立山連峰や能登半島を望むことができる。山頂からは大佐渡山脈の北部の山々と、ほぼ全島を望む。

栗ヶ沢登山口から金北山まで3時間10分。

△金北山～白雲台

防衛省管理道路を歩くもので、後述する4ヶ所の届出先に登山届を提出すれば、航空自衛隊佐渡分屯基地への事前通告は必要ない。

金北山から白雲台まで1時間15

ドンデン山方面から見た秋の大佐渡山脈縦走路と金北山

早春のドンデン山から樵ヶ平山（中央）、金剛山（右奥）方面を望む

分。

△ドンデン山～金北山

佐渡の山歩きで一番変化のあるルートと言える。ドンデン山荘から車道を西へ歩いて20分ほどで金北山への縦走路の起点となる。まずは尾根筋と登山道の両ルートから青ネバ越へ下る。

青ネバ越からの小さな急登から平坦となれば、キクザキイチゲの白や紫、オオイワカガミやシラネアオイ、カタクリ、エゾエンゴサク、小沢の源頭となる湿地にはサンカヨウの花なども見られる。急登をつめブナの木が現われると孫次郎山（938m、地形図名マトネ）の頂上は近い。マトネとは主稜線の峰の総称である。

梅津川沿いから見上げた残雪期の金剛山（右）

主稜線に沿って下降すれば、石花越に至る。コルには夏にハマナスの花が咲き、昔日に海産物を国仲に運び、国仲の米とコイキ（交易・交換）した海府乙女の姿がしのばれる。主稜線はザレ、シラバ、杉林などが続き、両サイドが海であるため、潮風を受けて島の山らしい心地良い山歩きが楽しめる。

イモリ平はかつては放牧牛の休息場で、今はシラバが後退し、サワフタギなどのブッシュに覆われている。長いザレを登るとシラバは天狗の休み場までない。この後、主稜線は杉やリョウブ、ミヤマシキミ、チシマザサ、タカネザクラなどのブッシュとなって、役ノ行者堂跡に至る。跡地にはかつて御堂があり、堂内に佐渡の名工の手になる2体の石像が安置されていたという。

足止清水（別名・行者清水）は夏場にはありがたい。これを水源とする鏡池と菖蒲池までの間が平坦になっていて、昭和4年に「大旱魃による千把炊き」がこの辺で実施されたという。国仲から「千把炊きの火が見えると言って、家から出て人々は拝んだ」と当時の文献にある。山頂手前の絶壁を登れば、金北山頂上は近い。

金北山縦走路入り口から金北山まで4時間5分）

▲ドンデン山

広大なシラバ、草を食む牛馬の群れなど、牧歌的風情がこの山の特徴であった。なお、「ドンデン」という意味不明の山名は、近隣の俗称や俗名であったものが山容とマッチしたことから、近くの山と比較して緩くなだらかな山で鈍（ドン）嶺（デン）、丸い山だから団嶺（ドンデン）と呼ばれるようになった。

ドンデンと呼ばれる以前は「タダラ峰」と言われたが、禿（はげ）やザレの山肌がただれた状況「タタラ現象」として、麓周辺の地名と相まって多々良（鍛冶屋）説などと結びつけられてきた。山頂からの展望が良いことや、ドンデン山荘があることも人気の一因だろう。

△青ネバ渓谷～青ネバ越～ドンデン山荘

ドンデン山への人気のルートで、青ネバとは青い粘土層からの命名。オオミスミソウやフクジュソウ、白・紫のキクザキイチゲ、カタクリ、シラネアオイ、サンカヨウ、ヒトリシズカ、ニリンソウなどが咲く花の谷。

青ネバ登山口からドンデン山荘まで2時間10分。

△青ネバ越～ドンデン・キャンプ場～ドンデン山荘

青ネバ越からドンデン山荘まで1時間40分。

▲金剛山

かつて修験の山であった金剛山（962m）は「三山駆け」のルートで「吉野、熊野、大峯」にならったもので、三山形式あるいは三尊形式として各地に移された。戦前まで、男子3歳、あるいは5歳のときに親が親戚の人を頼んで、金北山から檀特山（だんとくさん）、金剛山（こんごうせん）を巡る「三山駆け」があった。これは子どもの健やかなる成長を願う習わしで、

成人になれば、いつでも「三山駆け」ができた。なお、白瀬集落では金剛山を「金ヶ嶽」と呼んでいるが、吉野の金峯山は古くは「金の御嶽」と呼んだ。

金剛山祭りは10月24日、里堂となる麓の白瀬集落の薬師堂で、今も念仏などが行なわれており、祭りを終えると集落区長が山頂の清掃に登る。小さな祠と三等三角点のある山頂からの展望はすばらしい。金剛山へのルートとして白瀬集落からとドンデン山から、広域基幹林道石名・和木線からのコースタイムを記す。

白瀬木戸口（登山口）から金剛山まで2時間50分。

ドンデン白骨池から金剛山まで3時間25分。

広域基幹林道石名・和木線から金剛山まで1時間35分。

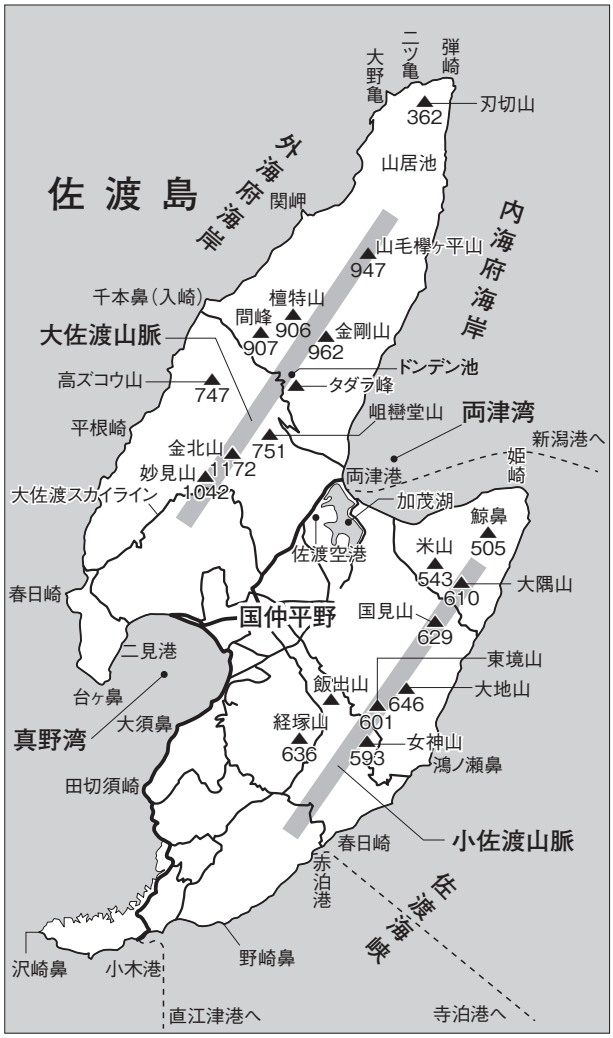
▲撫ヶ平山（地形図名・山毛欅ヶ平山）

ブナの木に覆われた947mの山で、主稜線の両津湾側の歌見集落の山が、一定の勾配での傾斜を「平」と言うところからの命名である。一等三角点本点の山で、測点名（点の記）は「武那ヶ平」とあり、明治31年10月29日に測量されている。

周辺は新潟大学演習林となっており、杉の巨木や奇形木・変形木が多く、自然保護のため入山にはガイド付きが条件となっている。申込み・問合せは一般社団法人・佐渡観光交流機構（TEL0259-23-5000　FAX0259-23-5030）

▲小佐渡山脈

一番高い大地山や二番目の経塚山（636m）、男神山・女神山、飯出山、元飯出山、東境山、国見山、米山などがあるが、いずれも主稜線に沿って走る林道から10～30分余りで山頂に立てる。



山旅のメモ

佐渡島内における登山に当たっては、登山計画書の提出が義務づけられており、左記のいずれかに提出していただきたい。

＊佐渡トレッキング協議会（TEL0259-23-4472　FAX0259-23-4478）登山届の様式は同協議会のホームページから入手できる。

＊佐渡汽船内・佐渡観光交流機構両津港案内所（TEL0259-27-5000　FAX0259-23-5030）

＊ドンデン山荘（TEL0259-23-2161）

＊交流センター白雲台（TEL0259-61-1172）

また、春の野草シーズンには「花観賞ライナーバス」が運行されている。3路線あり、いずれも事前予約制。「ドンデンライナー」は両津港～ドンデン山荘下駐車場間を行き2本、帰り2本運行。「金北山ライナー」は白雲台→両津港→椎崎温泉間の1本のみ。「カンゾウライナー」は両津港～二ツ亀～大野亀間を行き2本、帰り2本運行。

予約と運行期間や時刻、料金などの問合せは新潟交通佐渡㈱定期観光バス予約センター（TEL0259-52-3200）まで。

（越後支部会員、佐渡市在住）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

宮城支部
「自粛」の中での支部活動

令和元年12月に中国・武漢で確認された新型コロナ感染は、いまだに終息の兆しは見えず、社会活動、経済活動に多大な影響を及ぼし続けている。宮城県内の感染状況は経済都市である仙台市を中心に「緊急事態宣言」の対象にはなっていないものの、東北では突出した感染者数となっている。

このような状況下で、支部活動も自粛を余儀なくされた。例年、当支部では大まかに4つのカテゴリーで事業を計画し実施しているが、4月から6月の3ヶ月間はすべての活動を中止することとし、会員など皆様へは、「新型コロナウイルスへの対応について」と題した文書を送り、活動自粛についての理解を求めた。7月初旬には臨時役員会を開催し、今後の4カテゴリーの実施方針について確認した。1つ目の定例役員会は、7月以降感染状況を見つつ計画どおり（12月、1月は第3波で中止）実施することとした。役員会の開催に当たっては、当然のごとく蜜を避けマスクを着用して行なっている。

三方倉山での厳冬期山行

2つ目の月例山行については、7月以降は計画どおり実施することとしたが、公益事業として行なっている公募型の登山教室と県境をまたぐ遠征登山は中止、共益事業として実施することとし、これについては、計画どおり実施してきた。実施に当たっては、山岳4団体から発出された「ガイドライン」を参照しながら、感染予防を意識して山行を行なうようにしてきた。3つ目の親睦的事業として行なってきた夏のビールパーティおよび年末の支部晩餐会&オークションも中止することとした。結果、飲食を伴う集いは全く開催されていない。会員同士が「疎」になることが懸念される。4つ目の台湾遠征登山（雪山）は、中華民国山岳協会からは再三のお誘いがあったが、渡航事情もあって中止とした。

これまでは、事業を通じての感染は当然のごとく起きてはいないが、私ども宮城支部はご多分にもれず「高齢化」した団体でもあるので、新型コロナウイルス感染の終息が見えない状況でもあることから、感染の危機は常に至る所に存在するとの認識の下、「感染しない」をキーワードに、日々の活動を続けていきたいと思っている。

蛇足になるが、宮城支部では支部の活動費としての会費を会員から徴収していない。代わって、晩餐会のオークションの売り上げ、月例山行への参加費で支部運営費の一部を賄っている。令和2年度は、コロナの影響でオークションは中止。また、月例山行も一部中止。実施した山行も参加者減のために収入減が確実であり、支部運営費に影響が出兼ねない状況となっている。

（支部長・冨塚和衛）

三方倉山山行の参加メンバー

宮崎支部
貴重な経験となったこの1年

当支部の昨年の事業活動は、新型コロナウイルス感染拡大により

コロナに翻弄され、各種事業の中止など大きな影響を受けた。今年も年明け早々政府の緊急事態宣言発令を受け、県独自の緊急事態宣言がなされ、1・2月の定例の山岳研究会・山行はほとんど中止をせざるを得なかった。これまでコロナの感染状況などを注視、感染防止対策にも十分配慮しながら活動を行なってきたが、その中から一部をピックアップして紹介する。

まず、残念の極みが全国支部懇談会の中止である。令和元年1月に準備委員会を立ち上げ、諸企画、登山道の整備など会員一丸となって取り組んできた。しかし、コロナ感染拡大が収まらず5月開催を10月に延期するなど、でき得る限りの手を尽くしたが、中止を余儀なくされた。残念な結果となったが、約1年半の準備期間の中で、各支部含めいろいろな会員との絆が築かれ、貴重な経験と時間となった。

向坂山頂上での集合写真

山行は昨年1月に船で県南の無人島「大島」へ渡り、島内探索。キラキラと輝く太平洋・日向灘を眺めながらの年の初めのトレッキングは、支部活動の明るいスタートを予感させるものであったが、一転して2～5月はすべて中止した。6月は久しぶりの山行で霧島連山のミヤマキリシマ満開の韓国岳（1700m）。快晴で開聞岳なども一望でき、会員からも感嘆の声が上がる。

10月は日向岬巡り、11月は県北の向坂山（1684m）、白岩山（620m）を登った。向坂山は日本最南端の五ヶ瀬スキー場のある山で、秋晴れの青空に紅葉が映えてきれいであった。頂上では支部重鎮の3組のカップル会員が「これが2人での最後の山頂での写真になるかもしれないなぁ」と冗談を言いながら仲良くポーズをとられるなど、微笑ましく楽しい山行となった。

自然保護活動（森づくり活動）は以下の事業を行なった。全国支部懇談会の記念山行で予定していた「双石山（ぼろいし）」の、登山口の杉伐採後地などで、3月は登山道整備と植樹、7月は育林作業（草刈り）、10月は捕植15種600本の作業を山仲間合同（宮崎市山岳協会主催）で実施した。また、支部では毎年12月に双石山の清掃登山を実施しているが、今回は初めて、宮崎市山岳協会などと共同で登山口周辺の県道脇の清掃を実施し、予想をはるかに上回るゴミ106袋を収集した。以上が、コロナ禍の中での事業活動の概略である。

双石山の森づくり活動に参加したメンバー

2月からようやく新型コロナウイルスのワクチン接種も始まった。「コロナ退散、春よ来い」と、1日も早いコロナウイルス感染収束を強く祈る次第である。

（副支部長兼事務局長・日高研二）

寄附金および助成金などの受入報告
（令和3年1月31日まで）

寄附者など	受入金額など（単位千円）	寄附の目的、その他
静岡支部会員8名（別紙1）	86	創立70周年募金（2020年追加分）
越後支部会員他32名（別紙2）	448	高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金

（別紙1）静岡支部創立70周年募金受入報告

（順不同、敬称略）

2万円	山本良三
1万円	實川欣伸、有元利通、長野和義、白鳥勝治、大石惇、匿名希望1名
（1万円未満1名の氏名省略）	

（別紙2）高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金受入報告

（順不同、敬称略）

10万円	日向祥剛
5万円	松井潤次
3万円	古野淳、後藤正弘、山﨑幸和
2万円	小山一夫、橋本正巳
1万円	久保田賢次、荒武八起、大山光一、根井康雄、渡部展雄、節田重節、越後吉田山岳会、松井拓也、酒井定勝
（1万円未満16名の氏名省略）	

熊本支部

支部行事の大きな見直し

4月半ばに新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言および山岳4団体からの「山岳スポーツ行為の自粛要請」が発出されたことにより、今年度の支部行事について大幅な見直しが必要となった。

まず、支部役員会の開催が、予約していた会議室の閉鎖でできなくなり、やむなく中止(4月)、または屋外での開催(5、6月)とした。その間、毎月発刊している支部通信に山岳4団体からの「山岳スポーツ行為の自粛要請」を掲載するとともに、熊本支部の活動自粛(ほとんどは中止)の連絡、並びに3密を避けた個人山行の推奨を行なった。

秋の森林巡視登山(久住山頂上にて)　撮影＝田北芳博

3密を避けるため、支部行事を実施する際には次のような方法を示した。

①現地集合・現地解散方式を原則とする　②現地集合とするため、登山口周辺の駐車スペースの確認　③縦走コースからピストンまたは周回コースへのルートの見直し　④やむなく自家用車乗合いの場合は、乗車時間を最小限とし、マスクや定期的な換気の徹底。

多くの行事が中止となる中で、実施できた行事は、①春の森林巡視登山として、九住山赤川登山口から九住山登山……赤川登山口(路肩駐車可能)に現地集合して九住山へ登り、神明水から南登山道を下山、赤川登山口へ戻る周回コースで実施　②秋の森林巡視登山として三の岳登山……吉次峠登山口へ現地集合。三の岳をピストン　③秋の登山教室として、雲仙普賢岳登山……熊本港および長洲港の各フェリー乗船場へ各人個別に集合、島原港および多比良(たいら)港フェリー下船場から登山口までは10kmほどを乗合い　④同好会活動…

…平成31年4月から会員・会友のみを対象として、各人好きな山行（たとえば、花を愛でる、写真を撮るなど）を実施する同好会活動を開始したが、当初から現地集合方式のため、3密を避けられ実施できた。その中で、体力に自信がない方でも参加できる山行を目指した「低山里山クラブ」は、対象の山が低山・里山であるため一般登山者が少なく、計画の10回の内、7回実施できた。ただし、令和3年1月に発出された、熊本県独自の緊急事態宣言期間中は、同好会活動も含めすべて中止とした。

なお、7月の人吉水害については、復旧支援活動を行なった（6回実施、延べ29名参加）。いずれにしても、新型コロナウイルス感染症が早く終息し、通常の活動に戻れるよう願うばかりだ。

（事務局長・山本 直）

図書紹介

山あれば人あり

砂田定夫著

2020年12月
日本山岳文化学会
A５判　252ページ
頒価2000円

日本山岳文化学会（酒井國光会長）の「山岳文化叢書」の第10輯として刊行された一書。著者は同学会の理事で、「登山家研究分科会」の代表を務めている。

登山史を語るとき著者は、「登山史は年表や事実の時系列的記述だけでは語り切れない。そこに人物が浮き彫りにされてこそ生きた登山史となりうる」というスタンスで臨んでおり、本書の内容も、サブタイトルの「登山史に躍動した人びと」に強い光を当てた論考となっている。

全体は4部構成となっており、「第一部　登攀者たちの軌跡を追う」「第二部　先蹤者たちの交友をめぐって」「第三部　登山史の狭間で」「第四部　山なみは語る」と続く。巻末には著者自身の作成になる「資料」として、年譜・年表や文献リストなどが36ページにわたって収録されている。

ＪＡＣ会員にとって注目すべきは第一部と第二部で、まず目を引かれるのが第二部第一章「小島烏水と岡野金次郎」ではなかろうか。ふたりの運命的な邂逅によって日本山岳会が誕生するエピソードはよく知られるところだが、創立発起人7名の中になぜ岡野の名前がないのかという疑問に対する答えを含め、ふたりの人となりが詳しく綴られている。

同じように人物対比の形で同第二章には「木暮理太郎と田部重治」が登場する。著者は「日本における近代登山史の源流にある登山者たちの一部には、独特の静観的・観照的な流れが存在していた」とし、その原点にあるふたりの先蹤者について、交友を通して見た人物像や自然観、果たした役割などについて考察している。

次いで興味を抱かせられるのは第一部第一章「反骨の登山家　小谷部全助」と、同第二章「庶民派クライマー　北条理一――謎多きその実像を追う」の2章だろう。現代の登山者にとっては大分縁遠い存在となっているが、北岳バットレスや鹿島槍ヶ岳・荒沢奥壁などにおける積雪期の登攀記録で登山史にその名をとどめる小谷部全助。剱岳・チンネや前穂高岳・北尾根Ⅳ峰正面壁のルート名にその名を残す、伝説的な名クライマー北条理一。ここでも著者の持論のとおり、様々な文献を渉猟して、ふたりの人物像を浮き彫りにしている。

特に不世出の名クライマーと謳われ、登山史上に燦然と輝く足跡を残した小谷部だが、最強のパートナーだった森川眞三郎と同じ日、同じ場所、同じ病で32年の生涯を閉じている。そのようなドラマチックな生涯が、小谷部自筆の「山日記」など多くの文献を基に詳述されている。

そのほか、著者が神奈川支部会員だけに「第三部第三章　山岳会を創ったハマの岳人たち」も我々としては見逃せない。ＪＡＣのルーツが横浜にあることを、改めて

知らされることだろう。

なお、いずれの文末にも詳細な「引用・参考文献」と「引用外の参考文献」が記載されているのが本書の特徴だが、その数の多さに目を見張らされる。

本会の創立１２０周年記念事業のテーマを「温故知新」としているが、このような本こそ、多くの若い会員たちに読んでもらいたいと願っている。

なお、本書の購入希望者は直接、著者に連絡されたい。〒２５２－０２３４ 相模原市中央区共和３－９－14 砂田定夫 ✉sunada-ckn@tbz.t-com.ne.jp

（節田重節）

サバイバル家族

服部文祥著

2020年9月
中央公論社
四六判　256㌻
1650円＋税

服部文祥の奥さんが書いた『はっとりさんちの狩猟な毎日』という本がある。この本の最初に、奥さんの小雪さんが文祥さんを評して、「平穏に暮らす人々に対し、生きることの意味を無理やり考えさせるような挑発をするので、家族はいつも苦笑いしている」と書いている。さすが奥さん。文祥さんを短い言葉で端的に表わしている。

その文祥さんが家族のことを書いた本が『サバイバル家族』である。雑誌に掲載したエッセイを中心にまとめた本なので、37もの細かい章立てになっている。

最初だけ、「嫁狩り」「あたり嫁」といったタイトルで馴れ初めから結婚、出産に至る奥さんのことが書かれているが、後にはほとんど奥さんは登場しない。

柱となるのは、３人の子どもの誕生から成長の話である。もし、奥さんも含めて服部家を理解するなら、最初に挙げた本を読んで欲しい。

文祥さんについても、できれば、先に代表作である『サバイバル登山家』『狩猟サバイバル』『ツンドラ・サバイバル』を読んでからこちらを読む方が、家族との生活においても、彼がいろいろなこだわりを持っていることが納得できる。

彼が、家族に公言しているルールは、「挨拶は家族間でもちゃんとすること。食事時は自分の姿勢がシンメトリックになるように座ること。歯の健康を維持すること」だそうだ。しかし、家族ということに関して彼が考えていることは、それだけではないのは当然である。

本書の柱である子どもの成長で、特筆すべきは３人の元服旅行であろう。それぞれが中学生になる前に、文祥さんと２人で旅に出るのである。３人それぞれ特色ある旅になっている。これはもう少し詳しく知りたい話である。

あと、興味深かったのはニワトリを育てる話である。ヒナから育て、ニワトリ集団となり、老いて亡くなるまでを書いている。文祥さんの考えでニワトリを飼い始めるのだが、奥さんの書いた本を読むと、文祥さんが山へ行って家にいない間に、ニワトリの世話では奥さんがかなり苦労していることが分かる。

最近、文祥さんは、廃村になった関東近郊の家を買ったそうだ。本書では一番下の娘が高校に入るところまでだが、その後、服部家はどのように成長していくのか興味深いところである。

（北島洋一）

下山の哲学

竹内洋岳著

2020年11月
太郎次郎社エディタス
四六判　256㌻
1800円＋税

８０００m峰14座のサミッター、竹内洋岳氏の近著で、２０２０年10月の刊行。竹内氏はすでに『登山の哲学』を書いているが、前著が出たのが14座完登直後の２０１３年だったから、そうした大きな目標を達成して以降に、自らの登山、もしくは山に登るということを巡ってなされた思索の成果が盛り込まれていると考えてよいだろう。そこには、プロ登山家としての進化の軌跡をたどることができるに違いない。

タイトルから分かるように、登りよりも、下りに力点を置いた内容になっているわけだが、強調されているのは、ゴールは頂上ではないということ。登山を一つの輪として考えるなら、登りと下りは一体であって、頂上に着いてからベースキャンプに戻って来て初めて登山が完結する。しかも、下り

は、ある意味で登りよりも重要だ。事故や遭難なども、実は下山時に発生することが多い。通常、登頂をクライマックスにして物語が語られるものだが、下山にも、それを超えるような感動のドラマがあり得る。

下りの辛さは、特に８０００ｍ峰でなくても、我々一般の山登りでさえ普通に経験していることだが、それはまた「デスゾーン」からの下りならばこその、極限の経験が語られていて迫力が違う。なにはともあれ、まずは、そうした14座の貴重な下山の記録として興味深い読み物になっている。14座については、それぞれの山の紹介、初登頂者、それに登山用語の解説など、一般の読者を想定した配慮もなされている。また、コラムの形で挿入されている、著者の友人たちによる竹内評といえる記事も楽しく読める。

タイトルに「哲学」という言葉が付いているが、別に構える必要はない。「下山」をキーワードにした著者独自の登山と向き合う姿勢について、親しみやすい文章で書かれていて、読みながら、自分の登山を振り返るきっかけを与えてもらえるはずだ。特に、巻末に付せられた「つぎの山へ」の章は、その意味で、示唆に富むものだろう。14座を完登したことは、その時点で竹内氏にとっては、８０００ｍ峰全座という目標の輪が閉じたことになる。そうした一つの目標から下山した今、自分が立っている所を、これまで続けてきて、この後も続いていく挑戦の連鎖における「現在地」と設定して、その先にある「つぎの山」を展望しながら新たな目標を見つけようとしている。ついに念願の目標が達成されたときの、これで終わってしまった！と湧き上がってくる感慨は、喪失感などではなく、次の挑戦への期待感なのだった。

多くの登山者が、なんらかの目標を持って登山に臨んでいる。百名山はその典型だろうし、竹内氏のような14座サミッターもそうだった。そのように既成の形で設定される目標は、ある意味で分かりやすいし、お仕着せとまでは言うまいが、そのまますぐ挑戦してみたくなる面もあるわけだ。だが、予め定められたのではない、新たな登山に向かってチャレンジすることも大切なのだ。そのことを、著

図書受入報告（2021年1月～2月）

著　　者	書　　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
小林二三雄	登山家W.ウェストンと清蔵　（みやま文庫 No.198 復刻版）	169p／19cm	みやま文庫	2010	八木原圀明氏寄贈
佐藤要（編）	鳥海山を登る	298p／21cm	佐藤要（私家版）	2020	松沢節夫氏寄贈
山書総目録編集グループ（編）	山岳関係図書目録 ：和書 1988-2018	504p／27cm	日本山書の会	2020	発行者寄贈
柴田昭彦	旗振り山と航空灯台：忘れられた歴史を探し求めて	324p／21cm	ナカニシヤ出版	2021	出版社寄贈
楠田哲士（編著）	神の鳥ライチョウの生態と保全：日本の宝を未来へつなぐ	288p／26cm	緑書房	2020	出版社寄贈
JAC東九州支部（編）	新大分百山：登山ガイド	220p／21cm	JAC東九州支部	2020	発行者寄贈
太田五雄・三橋和己	屋久島の神と仏：神社仏寺・山岳宗教・民俗神	399p／26cm	太田五雄（私家版）	2020	著者寄贈
粕谷俊矩	雲のソナチネ: 山歩きの雑記帳から	152p／19cm	佐藤要「山歩きの雑記帳」	2021	著者寄贈
西本武志	子どもに語り継ぎたい山の本	48p／21cm	Office Nishimoto	2020	著者寄贈
西本武志	巻頭言・編集後記に見る山岳雑誌の十五年戦争	334p／21cm	Office Nishimoto	2020	著者寄贈
柴崎徹（編）	仙台一高井戸沢小屋50周年記念誌	170p／26cm	仙台一高山の会	2020	編者寄贈
山と溪谷社（編）	ドキュメント山小屋とコロナ禍（ヤマケイ新書 No.YS057）	256p／18cm	山と溪谷社	2021	出版社寄贈
H.ノーバーグ・ホッジ	懐かしい未来: ラダックから学ぶ　増補改訂版（ヤマケイ文庫）	399p／15cm	山と溪谷社	2021	出版社寄贈
高澤光雄（編著）	北海道の山に貢献された日本山岳会の会員たち：続編	36p／21cm	高澤光雄（私家版）	2021	編著者寄贈
J.Langley, P.Gannon	The Alps：A Natural Companion - Geology, Flowers, Walks	300p／21cm	Oxford Alpine Club	2019	購入
Jan Redford	End of the Rope ：Mountains, Marriage, and Motherhood	305p／24cm	Counterpoint	2018	購入
Tom Hoyle（ed.）	New Zealand Alpine Journal 2020（Vol.72）	96p／28cm	New Zealand Alpine Club	2020	発行者寄贈

者は「新しい扉」と表現する。それを自分自身で開けるとき、その向こうに「私にとっての未踏峰」がある。

竹内洋岳という登山家のこれまでの挑戦の道程をともにたどりながら、我々一人一人が、自分の中で新しい扉を開けていくことの意味を、おのずと問い直してみるように促される。登山情報にあふれ、でき合いの目標も簡単に見つかるような状況の中にいる我々にとって、そうした問い掛けは刺激的だが、竹内氏の書きぶりは実に自然で、読んでいて心地よい。本や読書に造詣の深い著者なればこそ、その豊富な読書体験での成熟がそういった書き方に反映されているようにも思えた。

（飯田年穂）

会務報告

令和2年度第10回（2月度）理事会議事録

日時　令和3年2月10日㈬19時00分～20時45分

場所　集会室およびオンライン（Zoom）

【出席者】古野会長、永田・萩原・古川副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤・各理事、黒川・石川監事

【欠席者】山本副会長

【オブザーバー】節田会報編集人

【協議事項】

1・山岳事故の対応について協議（古野）

今年度の事故に触れ、ヒヤリハットや事故事例集の作成、山岳保険の内容、事故防止の対策などを協議。今後、遭難対策委員会とともに協議を続けることになった。

【報告事項】

1・正会員1名、準会員1名の入会を承認したことを報告した。（古野）

2・寄附の受入れについて報告があった。（古川）

3・1月30日に支部連絡会議がオンラインで行なわれ、29支部が出席したことなど報告があった。次回は4月17日にオンラインで開催。（永田）

4・今年度、中止となった公益事業について各支部に報告を求めている旨、報告があった。（古川）

5・登山教室指導者養成講習会の日程を再調整中である旨、報告があった。（坂井）

6・復活会員に関する問合せについて、報告があった。（永田）

7・山研の立木伐採について報告があった。（安井）

8・「山」4月号の取材予定について報告があった。（節田）

9・理事会、評議員懇談会、通常総会の予定について報告があった。（永田）

10・会報「山」2月号について報告があった。（節田）

ルーム日誌 2月

2日　常務理事会
3日　山行委員会
8日　スケッチクラブ
9日　財務委員会　フォトクラブ
10日　理事会　休山会　山想倶楽部
19日　会報編集委員会　スケッチクラブ　アルピニズムクラブ
22日　スケッチクラブ
24日　緑爽会

2月来室者　65名

会員異動

物故

平井一正（4639）21・2・15
菊地文雄（5767）21・2・6
田中勝彦（13342）21・1・14

退会

早津忠保（8417）関西
小林　碧（8827）
澤尻利弘（9319）北海道
柿崎國男（12635）北海道
岡田米司（13082）関西
中谷秀子（13657）北海道
田村貴代子（14352）広島
白島達彦（14414）越後
小柳安弘（15115）福島
谷川光秋（15464）四国
畠山政大（15901）神奈川
原口敬次（15960）東海

坂口弘記（16230）東海
佐藤恵美（16304）
鎌田典子（16341）神奈川
大友厚夫（A0037）岩手
吉岡礼子（A0060）
林　静枝（A0100）千葉
光延正広（A0108）福岡
小森田清子（A0155）
佐藤文良（A0166）

INFORMATION

◆佐渡の山旅　新緑や花と歴史を訪ねての会

山行委員会

ゆっくりとした行程で大佐渡山脈の山旅（ドンデン山から金北山）と、新緑・お花・歴史を楽しみませんか。

日程　5月23日㈰～26日㈬
費用　4万7000円（佐渡汽船運賃および現地交通費などを含む）
集合・解散　上越新幹線・新潟駅
募集人員　15名
申込み　4月25日までに会員番号、住所、氏名、電話、緊急連絡先などを明記し、上村紀子まで連絡してください。

〒272-0023 市川市南八幡4-18-18-806
FAX 047-377-9203
sanko@jac.or.jp
＊参加申込み者には別途、詳細案内をお送りします。

◆川井靖元写真展「岳・信仰・民」のお知らせ

高所山岳のチョモランマ、マナスル、カイラスを対象に、山と信仰、地域住民の生活を紹介。
○4月2日㈮～8日㈭
場所＝富士フイルムフォトサロン大阪（大阪市中央区本町）
TEL 06-6205-8000
○4月23日㈮～28日㈬
場所＝富士フイルムフォトサロン札幌（札幌市中央区大通西）
TEL 011-241-7170
＊東京開催はコロナ禍のため延期

◆1月号の記事の訂正と補足説明

「島の山旅への誘い」1小笠原諸島の記事中、左記のような訂正と説明不足がありました。お詫びして報告させていただきます。

＊躑躅山の登山口は、詳しく言うと「都道巽（たつみ）道路終点」で、下山口の地名は「北袋沢」です。さらに詳しく言うと「小港園地」の一部「小港駐車場」となります。

＊「躑躅山から千尋岩」コースにも現地の認定ガイドの同行が必要となります。

＊躑躅山山頂付近は、天然記念物オガサワラノスリの営巣・繁殖に影響を与えないよう、期間限定で立ち入りが制限されています。

＊名前のある山として父島で一番標高の高い山が中央山（319m）です。

（会報編集委員会）

❖編集後記❖

●深田久弥さんが亡くなられて、今年で50年になります。あの日から20年ほど後の、同じ春分の日に、甲府市在住の故山村正光会員と茅ヶ岳に登ったことがあります。彼は『車窓の山旅・中央線から見える山』という著書もあるJR中央線の〝名物車掌〟ですが、深田さんが倒れた直後、急を報（しら）せるため駆け下ったのが山村さんでした。

●深田さんの郷里は加賀市大聖寺ですが、逝去の3年後、旧大聖寺藩邸内に鎮座する江沼（えぬま）神社の境内に歌碑が建立されました。碑には「山の茜を顧みて　一つの山を終りけり　何の俘のわが心　早も急かるる次の山」と書かれた色紙陶板が埋め込まれていますが、残念ながら、深田さんに〝次の山〟はありませんでした。

（節田重節）

日本山岳会会報　山　910号

2021年（令和3年）3月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　古野　淳
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社